

---

# 紅の闇。

木立久美子

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

紅の闇。

### 【Nコード】

N4307C

### 【作者名】

木立久美子

### 【あらすじ】

「俺とあの方以外、みんな滅びればいい」  
元ストリートチルドレンの少年は、自分に光を与えてくれた恩人のため、両手を深紅に染めながら、闇の世界で生きていく。

紅の闇。

暗い路地裏にも光はあるのだと教えられた。  
血反吐に塗れながらも生きるすべはあるのだと。  
暗黒の世界が憎いなら、それを別の色で塗りつぶせばいい。  
それだけのことなのだ。

「おいで」

差し出される手のひら。

やわらかな声。

それまで無言で座り込んでいた少年が、ぴくりと肩を震わせる。  
僅かな沈黙の後、彼はのろのろと顔を上げ、眩しげに目を細めた。  
その人は太陽を背にして微笑み、まっすぐ自分の方を見つめてい  
る。

「君に、生きる理由をあげる」

世界に光があったことを、少年はこのとき初めて知ったのだった。

ダン！

高らかな銃声。

消えてしまいそうなほど微かな月光。

薄闇の中を漂うのは、硝煙の匂い。

地面に転がる無数の人間。

やむことのない呻き声と罵声、骨のひしゃげる音、肉の飛び散る

紅の闇。

音、血の滴る音、断末魔。

「…うるせえよ」

数ばかり多くて鬱陶しい。

少年は呟き、自分へ襲いかかってくる敵を次々に撃ち倒していく。急所を的確に撃ち抜かれた男たちは、少年に指一本触れることすら出来ず、そのまま地へ伏せた。

ある者は虫の息、またある者はもう既に魂すらこの世に亡く。

「…っ!?!」

「遅すぎ」

後ろから日本刀で斬りかかろうとしてきた敵を、少年は振り向きざまに蹴り飛ばし、そのまま倒れ込んだ相手の胸めがけて発砲した。こういうとき、自分の体格が小柄で良かったと少年は思う。

小回りが利くし、相手の懐にもぐりこみやすい。

「あんだでラスト？」

「…うああッ!?!」

恐れをなし逃げようとしていた最後の一人を見つけ、少年は素早くその前に回り込んだ。

銃声が、一発。

腹を撃ち抜かれて倒れ込む敵。

無表情の裏で少年は眉をひそめた。

はねかえる血液の生暖かさが気持ち悪い。

ああ、なんて醜い世界。

害虫どもが、あの方にたてつくから悪いのだ。

「…っ、!?!…ッ!?!」

敵の男が、まともな声すら出せずにのたうちまわっている。わざと急所をはずした。

逃げ出すような腰抜けは、なるべく苦しませた方がよい。

「ほんと、無様」

「…ッ…!?!」

ひゅっひゅっとうと耳障りな呼吸音。

紅の闇。

口から溢れ落ちる深紅の液体は泡状で、見苦しく滴り落ちては床へ染みをつくった。それらは、暗闇のせいでもす黒く見える。声にならない声で苦しみのたうち回る敵を、少年は冷たい瞳でまっすぐに見下ろした。

### 殺人マシーン。

そう呼ばれはじめて、もうどれぐらい経つのだろう。後悔なんてしていない。

これは、少年の生きる理由なのだから。

孤独だった幼い日。

誰にも見向きもされず、ゴミ溜めの中で生活していた日々。

黒い髪と黒い瞳、がりがりの手足、薄汚れた肌の色で、道を行く人々には「野良犬かカラスのようだ」と嘲笑われて。

そのたびに「みんな殺してやりたい」と思ったけれど、非力な子供の自分では、逆にやり返されるのが落ちだと解っている。

生きる意味もなく、でも死ぬのは怖くて、ただ絶望に蝕まれながら毎日を過ごしていた。

あの方に会うまでは。

### 君に、生きる理由をあげる

優しい言葉などかけてもらったことがなかった。

何かをもらったことも、手をさしのべられたことさえなかった。

生きる理由。少年にとって、それは何よりも素晴らしい“贈り物”だった。

それがたとえ、両手を血に染めて生きるような道だったとしても。

紅の闇。

三日月の寂光を背にして立つ少年は、まさに死神のようだった。恐怖で震え、どくどくと溢れる液体に浸かり、痛みに痺れた手足で動くことも出来ず、敵は必死で命乞いをしている。

それを無視して、少年はゆっくりと足下に転がる日本刀を手に取りつた。

振り上げる。

その瞳は冷たく澄んで、白い肌にこびりついた返り血が、なぜか美しく映えた。

それは正に悪魔のように。

「う…あ…あ」

日本刀を今にも振り下ろしそうな状態で構える少年に、敵の男の死への恐怖は一気にふくれあがった。がたがたと震えながら、ろくに動きもしない体を引きずって。必死に少年から逃れようとしている。

耳障りな声での命乞い。

助けてくれ。もう二度とお前の主君を狙ったりしない。

だからどうか、命だけは。

「…」

赦しを乞う男を、少年は蔑むように見つめた。

ああ、ほんとうに、なんて汚い。

こんな人間いらぬ。見たくない。気持ち悪い。

早くこんな仕事終わらせて、あの方のところへ帰りたい。

この世で唯一の、俺の“光”のもとに。

「俺とあの方以外、みんな滅びればいい」

紅の闇。

口元に笑みすら浮かべて、少年が凶器を振り下ろす。雲が月を隠し、辺りは完全な暗闇に支配された。

「終わりました」

『そう、ありがとう』

低く優しく、耳に心地よい声。

携帯電話を耳に当てたまま、少年はうつとりと目を閉じる。

『ごめんね、あんな大人数を君一人に任せてしまつて』

「いいえ、平気です」

あなたのためなら、何だつてする。

あなたが微笑んでくれるなら、どれだけ返り血を浴びようと構わない。

たとえ後で地獄に墮とされたとしても、今あなたの傍にいられるなら。

少年は思った。

ああ、本当に。世界が、俺とあなたの二人だけだったらいいのに。

『帰っておいで、待ってるから』

「…はい」

ふわりと嬉しそうに笑みを浮かべて、少年は携帯電話を手にしたまま歩き出した。

紅の闇。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4307c/>

---

紅の闇。

2009年3月24日10時21分発行